



高岡漆器

技を重ねて、美は磨かれる。



富山県推奨
とやまブランド

厳正な審査を経て

富山県内外の有識者で構成する「富山県推奨とやまブランド」育成・認定委員会が、「高い品質と信頼性・安全性」、「オリジナリティ」、「富山らしさ」、「市場性」、「将来性」の5つの基準で品目を評価し、厳正な審査を経て、「富山県推奨とやまブランド」の認定品を決定しています。

富山県の極上の産品

「富山県推奨とやまブランド」は、魅力ある富山県産品の中でも、とくに自信を持って誇れる極上の産品です。豊かな自然と歴史、そこで培われた人々の知恵や文化を「とやまブランド」の魅力と結びつけ、「富山県」の地域イメージとして国内外に発信しています。

富山県推奨とやまブランド
「高岡漆器」認定事業者

伝統工芸高岡漆器協同組合
富山県高岡市開発本町1-1 高岡地域地場産業センター内3F
TEL.0766-22-2097
<http://shikki.ec-net.jp/>



富山県推奨
とやまブランド

人と風土に、ストーリーがある
とやまブランド物語 VOL.14

富山県観光・交通・地域振興局地域振興課
TEL.076-444-9605 <http://www.toyama-brand.jp>



漆黒の車輪の上で 華麗な細工が踊る。

【高岡の歴史は 御車山の歴史】

5月1日、富山県高岡市の旧市街、山町筋に拍子木の音が甲高く鳴り響く。桃山時代の文化を今に伝える高岡御車山祭。拍子木に導かれて街を曳き回される御車山は、絢爛豪華な姿で沿道の人々を魅了する。御車山祭の歴史は1609年（慶長14年）の高岡開町に始まる。

利長は高岡に城を築き、商人や職人を招いて城下町を開いた。このとき城下の町衆に与えたのが、初代当主の前田利家が豊臣秀吉から拝領した御所車。町衆は御所車に、神が降臨する目印である鉾留や花傘、御神体となる人形などを加え、祭礼にふさわしい鉾山——御車山に仕立てた。

年には「山・鉾・屋台行事」の一つとして、ユネスコの無形文化遺産に登録された。

【集った技を 源流として】

御車山を受け継ぐ城下10町は、町ごとにその美しさを競い合った。高欄や長押には唐風の漆塗りを凝らし、車輪や轆も艶のある漆黒で仕上げた。さらに彫金や鍍金などの細工、織物の幔幕をあしらって、

鏡のような光沢を持つ呂色（ろいろ）に仕上げられた車輪（二番町御車山）



商工都市として発展させた町衆の心意気を伝える祭り（高岡御車山祭）



御車山の保存修復にも高岡漆器の技が生きている（守山町御車山）

町衆の心意気が、
御車山を動かす。



【多彩な技法を誇る 高岡漆器】

全国の漆器産地の中でも、高岡漆器は、漆の上に細工を凝らす「加飾」の技に優れていることで知られる。技法の多彩さでも他の産地を圧倒している。その背景には、時代ごとに新たな技法を採り入れながら、独自の進化を遂げてきた歴史がある。

江戸中期、京都で修業した辻丹甫は、中国から伝わった擬堆黒、擬堆朱、存星など

の技法を高岡に持ち帰った。これらの技法はやがて、漆の粘りを利用して立体感ある文様を浮かび上がらせ、単色の漆だけでは表現できない深みを描き出す「彫刻塗」として確立された。

江戸後期に活躍した初代石井勇助は、唐物と呼ばれていた明代の漆器を研究し、「勇助塗」を生み出した。砥粉を混ぜた錆漆で立体的な絵柄を描く「錆絵」、漆で描いた文様に金箔を貼る「箔絵」、さらに螺鈿や象嵌などを組

み合わせた総合的な技法だ。錆絵でも用いられてきた螺鈿を、さらに洗練させたのが「青貝塗」だ。

螺鈿とは、虹色の輝きを持つ貝殻の細片を組み合わせて文様や絵柄を描く技法だが、中でも、透けて青く見えるほど薄い貝を用いた細工を高岡では青貝と呼ぶ。「青貝塗」は、高岡の漆工たちが明治から大正にかけて生み出した技法である。

美へのあくなき情熱が 独自の技法を育んだ

【職人たちによる 共同作品】

高岡漆器の工程は大きく分けて木地、塗り、加飾からなる。

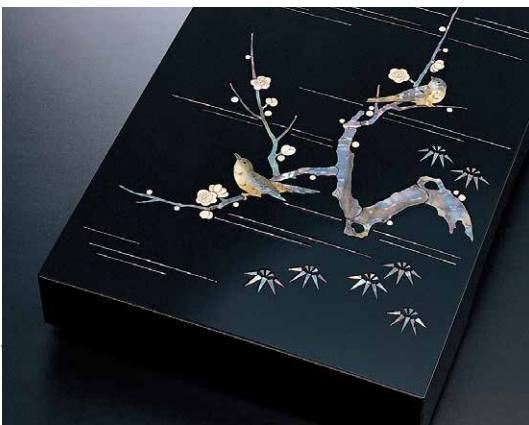
それぞれの工程を専門の職人が分担し、何段階もの作業を重ねて、はじめてひとつの作品が完成する。高岡漆器は、木地師、彫刻師、無地塗師、彫刻塗師、蒔絵師、錆絵師、青貝師といった職人たちによる共同作品である。



薄い漆の層を何層も重ねることで、独特の色合いと光沢が生まれる



吉野紙で漉した漆を用いることで、より滑らかな塗肌となる



無地塗師である齊藤慎二さんの工房では、下地付けから呂色仕上げまでを手がける。木地に薄く漆を塗り、時間をかけて乾かせた後に表面を研ぐ。漆の粘度や顔料を調整し、表面に鏡のような艶と奥深い色彩が現れるまで、幾度となく塗りと研ぎの手仕事を繰り返す。「漆は塗りより研ぎが大仕事」と齊藤さんは言う。



【天然の貝
ならではの美しさ】

青貝塗や錆絵、勇助塗の場合、下地付けを終えた漆器は、一旦塗師の手を離れ、加飾の工房へ引き継がれる。美しい光沢と色合いが備わった塗肌が、絵柄や文様に彩られ、高岡漆器ならではの装飾性に富んだ漆器に仕上がるのだ。

「何よりも集中力と根気が求められる仕事です」

青貝塗の工房「武蔵川工房」の代表者、武蔵川義則さんはそう話す。

明治43年（1910）創業の



工房は武蔵川さんで三代目。息子の剛嗣さんとその妻の裕美さんも、武蔵川家に伝わる青貝塗の技を受け継いでいる。

窓に面した作業台では、武蔵川さんをはじめ数人の職

「人が作るものだから

個性が表れます」

0.1ミリと極薄で、細密な図案を表現できることが特徴。深みある漆の肌に浮かびあがる絵柄の美しさでも知られ、現在、全国の螺鈿細工の約9割のシェアを占めている。

武蔵川さんが得意とするのは、淡い色合いの青貝を散りばめた花鳥の絵柄。花弁一枚、羽毛一枚ごとに微妙に異なるグラデーションが、

漆黑の上で輝きを見せる。

「人の手が作るものだから、どうしてもそこに個性が表れます。同じ図案でも、職人が違えば違う味わいになる。そこが面白いですね」

伝統的な手仕事の良さがあり、現代の生活スタイルにマッチするモダンな魅力も併せ持つ高岡漆器。多様な技法を柔軟に組み合わせながら、時代に合った商品

づくりにも挑戦することも高岡漆器の強みである。

近年は、ガラス器や銅器といった異素材、有名デザイナーとのコラボレーションにも意欲的に取り組む。「ホテル・レストランショー」や「東京インターナショナル・ギフト・ショー」などの展示会にも出展し、漆器の新たな可能性を拓く取り組みを続けている。



【時代に合った
商品づくりが強み】

人が、三角形や菱形に切り取った貝殻の細片を漆器表面に貼り付ける「貝付け」の作業に取り組んでいる。「天然の貝にはひとつとして同じものはありません。それだけに材料の個性を見抜いて、適材適所で使うことが大切です」。そう話しながら武蔵川さんは、貝の細片を窓にかざして色や輝き具合を確かめる。

高岡の青貝塗は、貝の厚みが

上：接着剤となる漆で下絵を描き、そこに細片を貼って絵柄を仕上げる
中：切り取った貝の裏に着色し、より多彩な色を表現する
左：武蔵川工房の武蔵川義則さん（伝統工芸士）



上：漆の文様が万華鏡のように浮かび上がるガラス酒器
中：青貝塗の花びらをあしらったスマートフォンケース
下：彫刻塗でキルトを想わせるデザインに仕上げたトレイ

【関連施設】



高岡御車山の歴史と文化を紹介する展示施設。山町筋の商家をイメージした施設で、全7基の御車山を交代で通年展示するほか、御車山の美を削り上げた高岡の伝統工芸——漆工、金工、彫刻、染織の魅力を紹介する。

高岡御車山会館

高岡市守山町47-1
JR高岡駅から徒歩10分
0766-30-2497
9:00~17:00
毎週火曜（火曜祝日のときは翌平日）、年末年始

message

華やかで重厚な美しさ

せきねよしこ
関根由子さん
伝統工芸ジャーナリスト・家庭新聞社代表



2016年秋、中国の上海工芸美術博物館で開催された「高岡漆器展」に、「青貝塗」「彫刻塗」「勇助塗」などの技法で作られた新旧約80点の作品が並びました。今まで日本では見られないものもあり、華やかで重厚で、その美しさに私は息をのみました。会場でも中国の伝統技法を元に日本独自の技法を生み出した作品群に、多くの中国人が魅了されていた姿が忘れられません。